

本連載における「翻訳」について ⑨

前回(1月号)では、ハーバーマスの翻訳の捉え方に対してのタルル・アサドの批判を紹介した。その中でアサドは、純粹な意味での「認知的行為」に翻訳の射程を限定するハーバーマスに対して、言語とは特定の生のあり方を具現化したものであり、宗教的言語の翻訳を考える際には、それを単に政治的主張の根拠のためのものに切り縮めるのではなく、感性的な要素を排除せずに他者の生き方を想像し、それを生きることによって、はじめて自らのものと同等の言語として翻訳ができるのである、と論じている。

この感性や生のあり方という言わば「身体」の領域を踏まえた翻訳のあり方について、アサドは著書中の「翻訳と感覚ある身体」(原題: "Translation and the Sensible Body")の章で掘り下げて論じている。そこでは、主にイスラームの伝統における聖典の言語や儀礼のあり方を事例に取り上げており、その視点から、ハーバーマス等が唱えるポスト世俗主義における宗教の「翻訳」について更に批判的な考察を深めている。

まずアサドは、イスラームの聖典であるクルアーンの特質としてよく取り上げられる「翻訳不可能性」について触れている。キリスト教の聖書とは対照的に、イスラームのクルアーンには厳密な意味での「翻訳」は存在せず、他言語に訳出されたものはあくまで「解釈」であるというのは、宗教全般に関心のある読者の中ではおおむね周知のことであろう。アサドは、その翻訳不可能性を説明するにあたり、それは「クルアーンを、現世において、現世のことに関わるだけの記号の体系に過ぎないものに世俗化してしまうことに対する警告であるかもしれない」(アサド 2018 = 2021: 84)と述べた上で、以下のように論じている。

クルアーンの翻訳不可能性は、それを啓示と見なすべきであることを示している。(中略)啓示には、それ自身の用語でしかアプローチできず、それが何であるかを決定することすら容易ではないことがしばしばある。(中略)私の提案は、特に礼拝の場でクルアーンが原語で詠唱されることは、(物理的—感情的—認知的な)特定の態度であり、その翻訳不可能性は、この感覚にとって固有の、特別な意味を持っているということである。アラビア語という言語が聖なるものなのではなく、超越的で創造的な力と信じられているものが現前する場における、神聖なる価値の宣言が聖なるものなのである。つまり、(クルアーンのテキストではなく)崇拝の行為が非翻訳的なものであり、その完全な意味は(七世紀のアラビア語を現代アラビア語で説明している辞書があるとしても)辞書の中で与え得るものではなく、涵養(cultivation)を必要とするものなのである。

(同上: 88、強調点は原文ママ)

筆者はイスラームについては全くの門外漢であるので、アサドのイスラーム理解についての議論には立ち入らない。しかしここで注目すべき点は、クルアーンのテキスト自体ではなく、崇拝という行為が翻訳不可能なものであり、その意味を捉えるには涵養(cultivation)が必要とされるという指摘である。これは、前回(2023年11月号)に取り上げた、アサドにおける「翻

訳」のあり方の中核を成す議論につながる視点である。

すなわち、ここでの翻訳は、クルアーンのテキストが別の言語に翻訳されるという意味ではなく、「特定の儀礼の伝統と魂の規律という文脈における実践に翻訳される」のであり、それは言い換えれば、「クルアーンの言語が感覚ある人間の身体へと翻訳されること」(同上: 94、強調点は原文ママ)とされる。すなわち、認知的行為のレベルを超えた、身体的な次元での翻訳というわけである。

そしてこの翻訳は、神聖なものから直接信者の身体へという形で起こるのではなく、「預言者の生という伝統的な表象——つまり、長年にわたり、友人から始まる一連の名のある個人によって伝達されたその発言と行動の説明」(同上: 96-97)から生じるのであり、クルアーンをその権威の究極的な源泉としながら、預言者に倣うことで培われる行動パターンを指すものと論じている。

アサドはここから、イスラームの法学者、神学者、神秘主義者であったアブ・ハミド・アルーガザリー(Al-Ghazali)の著作『宗教的知識の再興』を紐解きながら、自己の形成のあり方の話を進めていく。その自己を実現するには、さまざまな鍛錬が必要とされるが、そこでは伝統内における他者の存在の重要性が強調される。

自己は、自らの手によって自らを実現することはできない。それは、時間の中で、第三者(すなわち直接相互行為している相手以外の誰か)の視点をういた言説的伝統を通して形成される。日々の営みであれ、その潜在能力の完成であれ、自己の他者に対する依存は本質的なものであり、学習者やこの道をすでに成功裏に歩き通した人は、その成功と失敗を判断することができる。ガザリーの倫理的語彙は、徳ある魂の形成を制約し促進する動態を扱っている。ガザリーによれば、人間は、生まれながらにして神の規範に到達することを熱望するが、この世においては動物的身体に宿らざるを得ない。徳に対する熱望、覚醒、実現は、身体感覚を通してのみ可能になる。それは、他者との関係の内部での、その関係に関する理由付けに本質的である。

(同上: 105、強調点は筆者)

このように、崇拝の行為の意味を理解するのに必要とされる自己の涵養とは、決して自己で完結するものではなく、ある言説的伝統の中で培われるものであり、それは必然的に他者を必要とし、身体感覚を通して可能になるものであるとアサドは論じている。

この知見、すなわち聖典の言語が感覚ある身体へ翻訳されるという捉え方は、イスラームに限らず、身体的な実践が大きな役割を占める言説的伝統に対して大きな示唆を持つといえるであろう。無論、天理教もその一つであると筆者は考えている。

[引用文献]

タルル・アサド(菊田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

Asad, Talal. 2018. *Secular Translations: Nation-State, Modern Self, and Calculative Reason*. New York: Columbia University Press.